

## 復活の主日・日中のミサ

第一朗読 使徒言行録 10・34a、37-43

第二朗読 一コリント 5・6b-8

福音朗読 ヨハネ 20・1-9

2024.3.31 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

皆さん、主のご復活おめでとうございます。

今年もわたしたちはこの教会にとって最も大切な御復活のお祝いを一緒にお捧げすることができることを感謝いたします。

昨夜の復活徹夜祭の中では 10 人の方が新しく洗礼をお受けになりました。今日の第一朗読と第二朗読を朗読してくださったのは、昨日の晩に洗礼を受けられた方です。

そしてまた、今日は、侍者は——いつも子どもたちはしてくれていますけれども——普段は大人がやっている役割も侍者の子どもたちがやってくれています。こうしてだんだんいろんなことができるようになって行くし、また、わたしたちがこの復活祭に続く復活節を過ごしたのちに、こんどはキリストの聖体の祭日には、また子どもたちが初聖体を受けて、昨日の夜に洗礼を受けられた子どもたちも初聖体はちょっと待っててもらっていますが、他の子たちと一緒に受けまして、そうしてより深く教会と一致し、また侍者のメンバーも増えていくという、そういうことになります。

そういう意味で、イエス様がいつもわたしたちと共にいてくださることをお祝いするのが復活祭——いつものミサもそうですけれども——ですが、特に復活祭と同時に新しいメンバーを迎え入れる、そして子どもたちがだんだんいろんな役割をやっていくっていうことを通して、イエス様がいつも教会に新しい命を、新しい力を与えてくださる、そのことの目に見えるしるしとして、わたしたちは受け取ります。

教会がいつもイエス様の恵みによって新たに命を与えられて生かされている、この世の終わりまで。いつも新しい命によって生かされているだけではなくて、この復活祭を通して、わたしたち一人ひとりもイエス様にもう一度出会い直して、それぞれの生活の中でもう一回、力をいただきたいと思います。

今日の第二朗読では、パウロは古いパン種を取り除き、そしてパン種のないパンとしてこの復活をお祝いしましょうというふうに呼び掛けています。古いパン種を取り除く、そして酵母の入っていないパンとしてお祝いするっていうのは、もちろん、ただわたしたちのご聖体が膨らんでるパンじゃなくてぺっちゃんこのパンです、という意味だけではありません。今まで一年間心の中を満たしているいろんなもの

を一旦きれいにして、イエス様ご自身をわたしたちのパン種としてお迎えしましょう、っていう意味です。

わたしたちの心を満たしているもの、いろいろあると思います。でもその中でも特に、自分の生活は、あるいは自分自身はこの程度のものなんだ、あるいはいつも生活している周りの人との関係はもう固定されて変わって行きようがないんだっていうあきらめ、それを取り除くっていうことではないかと思います。

だから、今日それぞれお家に帰って、またいつも出会っている人と——家族もそうだし、また職場やいろんな場所で出会う人に対しても——もう一度イエス様から力を頂いて、普段よりにこやかにしてみるとか、小さなことでも——パン種って小さいことでも、でも大きくなっていくっていうことですから——声を掛けるとか、もう一回イエス様と共に新たに、それぞれ自分自身が、また自分と周りの人との関係において平和が成長していくように、新たな気持ちでイエス様から力をいただこう、そういうふうな思いを新たにすることも大切なのではないかと思います。

また、今日はこのごミサのあとに、当番の地区の方が準備してくださった教会のパーティーがございます。その中で、もうずうっと顔は合わせてるけど名前を知らなかったっていう、そういう方とお名前が分かるということでも大きな一歩かもしれません。

いろんな教会生活を通して、また、イエス様との内的な信仰生活の出会いを通して、一人ひとりが新たな体験、そして新たな希望を頂くことができますように。復活した主がいつもわたしたちと共にいてくださるという希望を持ちながら、このごミサを通してお互いのために祈り合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>